令和６年３月 14 日

令 和 ５ 年 度　　学 校 総 合 評 価

１　今年度の重点目標に対する総合評価

本校では、次の２項目（⑴学習活動 ⑵進路支援）においてそれぞれ重点課題を定め、今年度のアクションプランとして取り組んだ。

（１）学習活動（高等部）「学習に意欲的に取り組むための体づくり」

本校の児童生徒は、入院生活によって生活リズムを整えている側面があるため、家庭で週末を過ごす際に規則正しい生活習慣を整えることが難しい場合があり、週明けに体調不良を訴える様子がよく見られる。また、病院から学校へは通学距離が短く、入院生活で行動範囲が限られていることなどから、課業時間以外での運動量が極端に少なく、肥満度 20％以上の生徒が全体の 60％以上を占め、高度肥満の生徒も存在する。そこで、高等部における取組として、各自が歩数計を携帯し、朝の健康観察時に歩いた数値を入力してグラフ化する等、視覚化したものを学部全体で共有できるようにした。具体的には「学校から高岡大仏まで歩こう！」等、目標達成に向けて意欲的に運動量を増やせるよう、工夫して取り組んだ。歩数計の取組では、結果を大型ディスプレイに掲示することにより、学部全体で楽しみながら取り組むことができ、運動量を増やすことにつながった生徒もいた。この取組を通して、健康への意識が向上し、授業中の集中力が高まると共に、登校が安定した。

（２）進路支援「働くことに対する意識の向上を目指した取組」

児童生徒の大半が、不登校傾向や集団参加に対しての苦手意識があり、同年代の児童生徒との関わりには消極的である。転出や卒業後の新しい環境下への適応も難しいことが多い。児童生徒の中には、具体的な進路目標の決定が遅かったり、将来のイメージが描けなかったりする者がいる。また、具体的な目標が定まっても自主的、意欲的に学習に取り組めていない者も見受けられる。これらのことから、講義や職場体験、校内実習や就業体験等児童生徒が働くことについて考える機会を学部ごとに数回ずつ設けた。また、外部講師を招へいし、就労に関する知識やマナー、技術を学ぶ研修会を計６回設けることとした。改めて働くことについて考えたり、研修会へ参加したりすることで、学んでいることの意味や他者の考えに触れる貴重な機会となり、仲間と試行錯誤しながら教室清掃に取り組んだことが、児童生徒の働くことに対する意識の向上やモチベーションを維持することにつながった。

２　次年度へ向けての課題と方策

（１）生活の基礎を作る上で、体力作りの取組は重要である、今後は、自分と向き合うことで自己理解をさらに深め、将来に向けて必要な力の育成や学習等に取り組むことが課題となる。また、児童生徒の様子や、今何に興味があるか、今注力しているのは何か等、病院と情報共有していくことも大切である。

（２）今後は、児童生徒自身が意識の変化を振り返ることができるよう、記録を大切にしつつ、優先順位や目的を考えて行動する習慣が身に付くように、教員が日々の学習活動で機会を捉えて助言するよう意識していく必要がある。

令和５年度　富山県立ふるさと支援学校アクションプラン　―１―		
重点項目	学習活動(高等部)	
重点課題	学習に意欲的に取り組むための体づくり	
現　　状	○生徒は入院生活を送ることで生活リズムを整えているため、家庭で週末を過ごす際に規則正しく生活習慣を整えることが難しい場合もあり、週明けに体調不良を訴える様子が見られる ○通学距離が短く、入院生活で行動範囲が限られていることなどから課業以外の運動量が極端に少なく、肥満度 20%以上の生徒が全体の 60%以上で、高度肥満の生徒もいる。 ○様々な体の動かし方を経験して動作を習得したり、心肺機能を高めたりする時期に運動をしてこなかったため、体の動きがぎこちなかったり、持久力が乏しかったりする。 ○運動経験が少なく、苦手意識があるため、健康や運動に対する意識が乏しい。	
達成目標	新体力テストの数値の向上（60%以上）	
方　　策	○授業における取組:体育で体力トレーニングを実施したり、自立活動等でトランポリンやバランスディスクを活用し、バランス感覚を養ったりする。 ○学部における取組:各自が歩数計を携帯し、朝の健康観察時に歩いた数値を入力してグラフ化する等、視覚化したものを学部全体で共有できるようにする。「～まで歩こう！」と目標達成に向けて意欲的に運動量を増やせるよう取り組む。 ○新体力テストを５月と 11 月に実施し、数値の比較を行う。	
達 成 度	新体力テストの記録では、春と秋の比較において全９種目で 67%、主要４種目で 89%の向上がみられた。	
具体的な取組状況	○授業：体育での体力トレーニング(腹筋/背筋)、自立活動での運動の取組 ○日常生活：歩数計の装着、歩数入力の定着。ＩＷＢによるグラフ掲示 ○夏季補習：養護教諭による体組成と健康についての講義 ○記録：体組成計測、新体力テスト　　○アンケートと振り返り(生徒、職員)	
評　　価	A	・歩数計の取組では、大型ディスプレイの掲示により学部全体で意欲的に取り組め、運動量を増やすことにつながった生徒もいた。 ・体組成の取組では、数値化により健康上の課題の確認ができたり、変化を意識したりすることができた。 ・学習面では、授業中の姿勢の崩れが少なくなり、集中して学習に取り組めるようになった。また、欠席がほとんど無くなり、登校が安定した。
学校関係者の意見	・生徒の環境は、運動量の確保が難しい。将来に向けた生活の基礎を作る上で、体力作りの取組は良い。子供たちが今何を頑張っているか分かれば、病棟スタッフとの会話も豊かになる。学校での取組を病棟も共有できると良い。 ・歩数量や体組成記録を視覚化して比較する材料を与え、生徒に自分のこととして実感させ、興味をもたせる仕掛けを工夫した点が良い。体組成は耳慣れない言葉だが、少し難しいことに挑戦し、肯定的に捉えることで生徒が伸びる。	
次年度へ向けての課　　題	体づくりの取組で生徒たちは基礎体力がつき、学習参加が安定し、学習意欲の向上、集中力の継続につながった。また、数値の変化を通して自分の体と向き合えるようになってきた。今後は、自分と向き合うことで自己理解を深め、将来に向けて必要な力の育成や学習等に取り組むことが課題である。	

令和５年度　富山県立ふるさと支援学校アクションプラン　―２―		
重点項目	進路支援	
重点課題	働くことに対する意識の向上を目指した取組	
現　　状	○児童・生徒の大半が、不登校傾向や集団参加に対しての苦手意識があり、同年代の生徒との関わりには消極的である。転出や卒業後の新しい環境下への適応が難しいことがある。 ○具体的な進路目標の決定が遅い生徒や将来やりたいことが描けない生徒がいる。また、具体的な目標が定まっても自主的、意欲的に学習に取り組めていない生徒も見られる。 ○集団生活の中で養われるべき気付きや人との関わり方が未熟なため、他者の考えに目を向ける経験が少なく、自己理解が不十分である。 ○自分で優先順位をつけることや目的を考えて行動する場面が少ないため、自分で考えて動く習慣が身に付いていない。 ○生徒一人一人の将来の生活とのつながりを考えた各教科内の指導が有効とはいえない。	
達成目標	○働くことについて考える週間を設ける。（年間２回） ○生徒と教員を対象とした進路に関する研修会を行う。（年間４回以上）	
方　　策	○進路・教育相談部が中心となって、生徒が働くことについて考える週間を設ける。 ○中学部と高等部の進路に関する学習内容を記録し、整理する。 ○アビリンピック競技内容を参考にいろいろな仕事内容に取り組ませる。 ○外部講師から就労に関する知識や技術を学ぶ機会を設ける。	
達 成 度	働くことについて考える機会（小学部３回、中学部４回、高等部９回） 進路に関する研修会（年間６回）	
具体的な取組状況	○働くことについて考える： 小学部　授業と作業体験（12/1、20）研修会 1/25 中学部　講義（8/25、28）、職場体験（10 月）研修会 1/25 高等部　校内実習（7/24～28）、就業体験（6 月、11 月）外部講師を活用した研修会 ○学習内容の記録：中学部「道徳」「職場体験」 高等部「産業社会と人間」 ○様々な仕事内容に触れる：作業学習の内容の工夫 ○外部講師の活用： 就職ガイダンス「社会で求められるマナーやコミュニケーション」(8/23) 「清掃業の技術と心構え」（7/25、9/29、10/26、1/25） 就労支援セミナー「働くうえで必要なこと」（12/14）	
評　　価	A	働くことについて、それぞれの発達段階の児童生徒に改めて考える機会や研修会への参加を設定することで、少し先の将来を意識し、今学んでいることの意味や他者の考えに触れる機会となった。定期的に行う研修会や仲間と試行錯誤しながら教室清掃に取り組ませたことが、児童生徒の働くことに対する意識の向上やモチベーションを維持することにつながった。
学校関係者の意見	働くことの意味を自分の為だけではなく他者の為にと答える者が増えたのは取組の成果といえる。今後、子供自身の意識の変化を振り返ることができるよう、記録などを大切にしてほしい。	
次年度へ向けての課　　題	児童生徒に優先順位や目的を考えて行動する習慣が身に付くように、教員が日々の学習活動で機会を捉えて助言するよう意識する。毎週火曜日に実施している特別教室清掃でも、個人が目的意識をもって清掃できるような仕組みを考える。	